

# 慢性疾患患児を持つ母親が退院後に抱える不安

日本赤十字社和歌山医療センター 看護部

前田 由紀

索引用語：不安，母親，慢性疾患，退院後

## 要 旨

本研究は、慢性疾患患児を持つ母親の退院後の不安とその特徴を明らかにする目的で、小児科病棟を退院した患児の母親10名を対象に、退院1週間後と退院1カ月後に2回半構成的面接を行った。分析は、Krippendorff(1980)の内容分析法を用いた。結果、退院1週間後は【病気に関する事】【患児の将来に関する事】【日常生活に関する事】の3カテゴリー、退院1カ月後は【病気に関する事】【患児の将来に関する事】の2カテゴリーが抽出された。両時期のデータを比較したところ、退院1週間後の母親の特徴としては、漠然とした不安を多く抱えていること、退院1カ月後の母親の特徴として、行動範囲が広がったことによる不安が生じることが明らかとなった。以上の結果から、退院1週間後の母親には不安を表出できる場の提供とゆっくりと話を聞くこと、退院1カ月後の母親には不安の解消を図るために個々のニーズに応じた情報提供や具体策の提案が必要であることが示唆された。

## はじめに

近年、在院日数の短縮化により早期の在宅での療養が必要とされてきている。このような現状の中、慢性疾患患児を抱える家族が退院後、病気に関連した不安や困った事などを、外来受診中に相談することが多くなってきた。先行研究においては、NICUや産科、小児科の3領域において家族が退院後に不安を多く抱える時期は、退院して1週間後であると報告されている。日常の生活の落ち着きや不安の減少は、退院1カ月後の時期になると報告している<sup>1)2)3)</sup>。また、NICUや産科領域の研究では、退院1週間

後と1カ月後での不安や困ったことの追跡調査や、外来での相談窓口や電話相談による退院1週間後の不安減少についての介入研究も実施されている<sup>4)</sup>。しかし、小児科領域において、退院後に不安を多く抱える時期である退院1週間後の時期に焦点を当てた研究が非常に少ない。これらの過去の研究結果より、退院1週間後と4週間後では短期間であるにも関わらず、家族の内面に大きな変化がある事が示されている。退院後、病気を持つ子どもと初めて過ごす家での生活や、社会との接触が少しずつ始まる中で、家族は多くの悩みを抱え不安を持ち、それらは日々変化すると想像できる。多くの疾患の中でも特に慢性疾患は、予後が不確かで長期の療養が必要であり、患児とその家族は病気のコントロールや生活を維持する事に多くの問題が生じる。このような問題を解決するためには、退院後最も多くの不安を抱える時期であるとされる1週間後と、その不安が減少する時期である退

(平成25年9月6日受付)(平成25年11月1日受理)  
連絡先：(〒640-8558)

和歌山市小松原通四丁目20番地  
日本赤十字社和歌山医療センター  
看護部

前田 由紀

院1カ月後の、不安の内容を具体的に明らかにする必要がある。

分析結果を比較することで、その時期の特徴を明らかにした。

## 研究目的

小児科病棟に入院した慢性疾患患児を持つ母親の退院1週間後と、退院1カ月後を経過した時期における不安の内容を具体的に示し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

## 研究方法

### 1. 研究対象

対象はAセンターを退院した子どもを持つ母親で以下の条件を満たす者とした。

- ①患児の疾患が小児慢性特定疾患治療研究事業の対象となる11疾患群であること
- ②今回の入院が初回入院であること
- ③退院後1週間と、約1カ月後の計2回の面接調査に参加協力の得られる者

### 2. データ収集と調査期間

データ収集方法は、1対1の半構造化面接調査を行い、同意を得て会話を録音し、逐語録を作成した。面接内容は次の3点である。

- ①研究協力者の背景
- ②家庭生活や日常生活、社会生活上における不安
- ③その他の不安

調査期間は2010年11月25日から2012年3月30日であった。

### 3. データ分析方法

Krippendorff(1980)の内容分析の方法を参考にし、質的帰納的方法によって分析した。逐語録から母親の不安について語られている内容を、一つの記録単位として類似の内容からコード化を行い、コードをサブカテゴリ化し、そのサブカテゴリの類似性と相違性に従ってカテゴリ化した。さらにカテゴリは最終的にテーマに分類した。退院1週間後と1カ月後のデータはそれぞれに分析し、それぞれの

### 4. 信頼性と妥当性の確保

分析の信頼性と妥当性の確保のために、質的研究の経験があり臨床経験を有する大学院生2名に協力を依頼し、分析の各段階で討議を行い、分析結果の研究者間での単純一致率とKrippendorffの $\alpha$ 係数(1989)を算出した。また、研究の全過程において大学に所属する看護学研究者のスーパーバイズを得た。さらに、1週間後のコードは対象者に意味内容の確認を行い、記録単位のコード化についての信頼性を確保した。

### 5. 倫理的配慮

研究対象者には、書面と口頭で目的と方法プライバシーの保護に関する説明を行い、面接調査への協力は対象者の自由意思であり診察や治療には一切影響しない事を説明した。また、対象者の意思により面接調査の協力を中断する事ができることを説明した。そして、面接調査はプライバシーの確保できる部屋で実施し、同意後にICレコーダーに会話内容を録音した。また、調査結果は学会等で発表する可能性がある事も説明した。なお、本研究は大学の倫理委員会および調査病院の倫理委員会にて承認(番号;157)を得て行った。

## 結果

### 1. 研究協力者・患児の属性

研究協力者は10名であった。研究協力者と患児の属性は表1に示すとおりである。

### 2. 抽出されたカテゴリ

退院1週間後の母親の不安については、3テーマ、8カテゴリ、14サブカテゴリ、81コード、135の記録単位で構成された。退院1カ月後の母親の不安については、2テーマ、5カテゴリ、11サブカテゴリ、45コード、56の記録単位で構成された(表2)。以下か

らは各時期別に、テーマ、カテゴリの順で説明する。なお、記述中における【】はテーマ、[]はカテゴリ、<>はサブカテゴリ、「」でくくられた斜体文字は母親の語りの言葉を示している。退院1週間後と1カ月後の両データは、いずれも Krippendorff'  $\alpha = 0.9$  以上、単純一致率は90%以上あり、信頼性と妥当性は確保されたと判断した。

### 3. 退院1週間後の母親の不安

#### 1) 【病気に関する事】

【病気に関する事】は、[合併症や症状悪化に関する不安][病気のケアの継続に関する不安][病気の情報に関する不安][きょうだいの遺伝素因に関する不安]の4カテゴリで編成された。

[合併症や症状悪化に関する不安]は、〈合併症の出現や症状悪化が生じないだろうか〉〈死を意識する〉〈自分が見ていない所で患児に何か起こらないだろうか〉の3サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

*J* 「(放射線を)あてたところが癌化しやすい、(略)不安は常についてまわる」

[病気のケアの継続に関する不安]は〈治療を継続できるのだろうか〉の1サブカテ

ゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

*A* 「3回のインスリン治療と、これが何十年にもなってきたら面倒くさくなる」

[病気の情報に関する不安]は、〈周囲からの病気に関する情報に不安になる〉の1サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成されている。

*I* 「(義姉が)「じゃあ何群に入るの？予後は？」とか、色々聞かれて(略)余計に不安になる(略)」

[きょうだいの遺伝素因に関する不安]は、〈きょうだいも遺伝素因を持っていないだろうか〉の1サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

*J* 「染色体異常も調べてもらって、きょうだいもなることもあるって、不安」

#### 2) 【患児の将来に関する事】

【患児の将来に関する事】は、[患児の将来に対する漠然とした不安][患児の社会生活に対する不安][患児の精神面に対する不安]の3カテゴリで編成された。

[患児の将来に対する漠然とした不安]は、

【表1】対象者と患児の属性

ID	対象者の年齢	就業状況	患児の年齢	患児の性別	患児の病名	主な治療
A	43	専業主婦	10歳	男	I型糖尿病	食事療法 インスリン療法
B	35	専業主婦	2歳	女	I型糖尿病	食事療法 インスリン療法
C	37	発病のため退職	3歳	女	LCH	運動制限(立位禁) 内服療法
D	43	就業者	14歳	女	TTP・SLE	運動制限 内服療法
H	20	専業主婦	10か月	女	高インスリン血症	内服療法
I	37	専業主婦	6歳	男	IgA腎症	食事療法 内服療法
J	44	専業主婦	12歳	男	ホジキン病	食事制限 内服療法
K	44	専業主婦	14歳	男	バセドウ病	運動制限 内服療法
L	44	専業主婦	12歳	女	白血病	運動制限 内服療法
M	42	専業主婦	12歳	男	脳腫瘍	運動制限 内服療法

〈将来について漠然とした不安がある〉の1サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

A「10年後どうなるんやろう、5年後どうなるんやろうって1年後どうなんやって」

[患児の社会生活に対する不安]は、〈患児が思うように就職や結婚ができるのだろうか〉〈患児の将来に経済的な問題は起こらないだろうか〉〈病気と共に次の新しい学園生活を送れるのだろうか〉〈将来の患児の友達関係に支障がでないだろうか〉の4サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

A「企業によってはね、まあダメっていうところもやっぱり出てくると思うんです」

[患児の精神面に対する不安]は、〈将来患児に心の問題が出てこないだろうか〉の1サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

D「(治る)希望がないんで(略)希望があまり見えない(略)鬱とかになりそう。」

### 3) 【日常生活に関する事】

【日常生活に関する事】は、[元の日常生活に戻ることに不安]の1カテゴリで編成された。

【表2】退院1週間後の母親の不安：テーマ生成過程

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード例
病気に 関する 事	合併症や症状悪化に 関する不安	合併症の出現や症状悪化が生じない だろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>副作用である低血糖を起こさないか心配</li> <li>いつ合併症がくるのか考えると怖い</li> <li>脳に障害が出たら怖い</li> <li>腫瘍サイズが大きくなれないか気が抜けない</li> </ul>
		死を意識する	<ul style="list-style-type: none"> <li>死を直結してしまう</li> <li>死というものがとても怖い</li> </ul>
		自分が見ていない所で患児に何か 起こらないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>目の届かない所に行ったら心配</li> <li>見てない所で交通事故に合わないか</li> </ul>
	病気のケアの継続に 関する不安	治療を継続できるのだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>食事療法をずっと続けられるのだろうか</li> <li>患児が血糖測定の時間を忘れそう</li> <li>食事制限をこの先続けられるのか</li> </ul>
	病気の情報に関する 不安	周囲からの病気に 関する情報に不安になる	<ul style="list-style-type: none"> <li>同じ病気の子どもが再発した話を聞くと不安になる</li> <li>ネットに色んな情報があるが知ってしまうと怖い</li> </ul>
きょうだいの遺伝素 因に関する不安	きょうだい が遺伝素因を持 っていないだ ろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>弟も同じ病気に ならないか</li> <li>きょうだいの結 婚時、遺伝問 題を出されな いか</li> </ul>	
患児の 将来に 関する 事	患児の将来に 対する漠然 とした不安	将来に ついて漠然 とした不安 がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>遠い先の心 配をしてしま う</li> <li>これからの ことが不安・ 将来を考え ると何って わからない 不安がたく さんある</li> <li>病気でいろ んなことが 制限されて しまうので はという漠 然とした不 安がある</li> <li>10年後は どうなるの か漠然とし た不安があ る</li> </ul>
	患児の社会 生活に 対する 不安	患児が 思うよう に就職 や結婚 がで きるの だろ うか	<ul style="list-style-type: none"> <li>将来就 職できる のか</li> <li>遺伝の 事もある ので結婚 の心配を する</li> <li>無精子 症の心配</li> <li>周囲 からの偏 見で結婚 の時も色 々あるだ ろうと不 安</li> </ul>
		患児の 将来に 経済的 な問題 は起こ らな いだ ろ う か	<ul style="list-style-type: none"> <li>患児の 学費、結 婚、将来 の医療費 などの経 済面が不 安</li> <li>患児が 医療保 険に入れ ないから 将来は不 安</li> </ul>
		病気と 共に次 の新一 しい学 園生活 を送 れるの だろ う か	<ul style="list-style-type: none"> <li>保育園 の先生は どこまで 見てくれ るのか</li> <li>小 学 校は 受け入 れてくれ るのか</li> </ul>
	将来の 患児の 友達 関係に 支障 がで ない だ ろ う か	<ul style="list-style-type: none"> <li>食事制 限のため 大きくな ったら友 達と外食 に行けな いこと で友人 関係に ズレが生 じないか</li> </ul>	
患児の 精神面 に 対 する 不安	将来 患児に 心の問 題が出 てこ ない だ ろ う か	<ul style="list-style-type: none"> <li>思春 期にな って生 きてる ことにお もいつ めないか</li> <li>将来 患児が 何かし たい いう 気持ち をなく すかも しれ ない</li> </ul>	
日常 生活 に 関 する 事	元の 日常 生活 に 戻 る こ と へ の 不 安	元の 日常 生活 に 戻 れる の だ ろ う か	<ul style="list-style-type: none"> <li>塾に 行き 出す と時 間が 足り ない の で は</li> <li>パ ニ ック に な り そ う</li> <li>普 通 の 生 活 に 戻 る こ と へ の 不 安</li> </ul>
		周囲 から 偏見 の 目 で 見 ら れ る の で は な い か	<ul style="list-style-type: none"> <li>友 達 に 病 気 の 話 を す ると か わ い そ う、 治 ら な い な ど 偏 見 の 目 で 見 ら れ そ う</li> <li>近 所 か ら 病 気 に つ い て 悪 い よ う に 思 わ れ て そ う</li> <li>幼 稚 園 で ど ん な 噂 が さ れ て る の か</li> </ul>

[元の日常生活に戻ることに不安]は  
〈元の日常生活に戻れるのだろうか〉〈周囲から偏見の目で見られるのではないか〉の2サブカテゴリで編成された。これらは下記に示す母親の語りから生成された。

D 「普通の生活に戻る負担を考えると、自分もしんどいしあの子もしんどい」

K 「ほんま悲惨って…なんかあんなまそういうのを思われたくない」

#### 4. 退院1ヵ月後の母親の不安

##### 1) 【病気に関する事】

【病気に関する事】は、[合併症や症状悪化に関する不安][病気のケアの継続に関する不安][病気の情報に関する不安][子どもの遺伝素因に関する不安]の4カテゴリで編成された。

[合併症や症状悪化に関する不安]は、

〈合併症の出現や症状悪化が生じないだろうか〉〈自分が見ていない所で患児に何か起こらないだろうか〉の2サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

C 「すごい食べるんですよ、(略)言われるんですよね「太った」って。」

[病気のケアの継続に関する不安]は〈治療を継続できるだろうか〉の1サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

A 「一日三回の血糖測定を何十年もできるのか」

[病気の情報に関する不安]は、〈医療関係者からの言葉で不安になった〉〈悪い病気の情報を聞くと心が落ち着かなくなるかもしれない〉の2サブカテゴリで編成さ

【表3】退院1ヵ月後の母親の不安：テーマ生成過程

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード例
病気に関する事	合併症や症状悪化に関する不安	合併症の出現や症状悪化が生じないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10年先が心配、合併症は大丈夫?</li> <li>・血糖が心配、早期発見できるか</li> <li>・癌が全身に回らないか</li> </ul>
		自分が見ていない所で患児に何か起こらないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登下校中の一人の時に合併症が起こったらと思うと心配</li> </ul>
	病気のケアの継続に関する不安	治療を継続できるのだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一日三回の血糖測定を何十年もできるのか</li> <li>・食事療法に気を付けるという今の気持ちがいつまで続くのか</li> </ul>
		医療関係者からの言葉で不安になった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健所から将来のことを考えてるのかと言われ不安になった</li> <li>・知り合いの看護師から「どうせまた入院する」と言われた</li> </ul>
	病気の情報に関する不安	悪い病気の情報を聞くと心が落ち着かなくなるかもしれない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者会を勧められるが悪い情報を聞くと不安になる</li> <li>・今同じ立場の人と関わっても怖い情報あったら不安になるから聞きたくない</li> </ul>
		子どもの遺伝素因に関する不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きょうだいが遺伝素因を持っていないだろうか</li> <li>・きょうだいが結婚する時相手から遺伝を言われぬか</li> </ul>
患児の将来に関する事	患児の社会生活に対する不安	周囲から偏見の目で見られるのではないか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病気になったことを世間に知られると患児が不利になるのでは</li> </ul>
		患児が思うように就職や結婚ができるのだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患児の結婚の時遺伝問題がでてこないか</li> <li>・患児が就職した時周囲が理解してくれるか</li> <li>・自分の希望通りの職に就けるのか</li> </ul>
		患児の将来に経済的な問題は起こらないだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・将来の医療費</li> <li>・学費・家族を養うお金など成人した時のお金の心配をする</li> </ul>
		病気と共に次の新しい学校生活を送れるのだろうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚園はすごい目が行き届いているが小学校に行ったらものすごい心配</li> </ul>

れた。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

I 「もと看護師さんしてるっていう人もあってその、どうせ入院するんちゃう？って。(略)その一言が気になって」

[子どもの遺伝素因に関する不安]は、〈きょうだいも遺伝素因を持っていないだろうか〉〈患児が別の遺伝疾患にならないだろうか〉の2サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

A 「ほいでまた弟もいるんで、同じ血を分けてるんで、これは大丈夫か？って」

## 2) 【患児の将来に関する事】

【患児の将来に関する事】は、[患児の社会生活に対する不安]の1カテゴリで編成された。

[患児の社会生活に対する不安]は、〈周囲から偏見の目で見られるのではないか〉

〈患児が思うように就職や結婚ができるのだろうか〉〈患児の将来に経済的な問題は起こらないだろうか〉〈病気と共に次の新しい学校生活を送れるのだろうか〉の4サブカテゴリで編成された。これらは下記に示すような母親の語りから生成された。

I 「(感染予防のマスクをしている事で) そのうつされるのんが嫌やって、逃げられたらどうしようって思って」

## 考 察

### 1. 母親の抱える不安の特徴

元の日常生活に戻れるのだろうか〈将来について漠然とした不安がある〉〈将来患児に心の問題がでてこないだろうか〉などの項目は、1週間後にみられ、1カ月後にはみられなかった。退院1週間後の母親は、以前のような家庭内の生活に戻りきれず、元の生活に戻れるのかという事を不安に感じていると思われる。退院後間もないこの時期は、病児

を抱えた家庭生活が不確実であるがゆえに、不安の内容も漠然としたものとなり、多方面にわたる現実感のない内容が多いと考えられる。しかし1カ月後では患児と共に家で過ごす生活に母親が慣れ、元の日常生活に戻りはじめ地に足がつき始めた様子が伺える。難病や障害を持つ子どもたちやその家族が在宅療養時に抱える問題について、これまでに多くの文献で取り上げられている<sup>5)6)</sup>。慢性疾患患児を持つ母親は退院1週間後に漠然とした不安を抱えるという特徴が示されたことから、この時期には不安表出のために母親が話せる場の意図的な提供など、退院後早期の時点から介入する具体的な支援の重要性が示唆されていると考える。

〈周囲から偏見の目でみられるのではないだろうか〉については、両時期において共通してみられた。しかし退院1週間後では、近所の人や学校などの友人など患児や母親にとって、日常でもよく会う親しい人からの偏見の目を気にしており、1カ月後では行動範囲の拡大に伴い、すれ違った街角の人や店の店員などからの偏見の目を気にしていた。退院後1週間という短い期間では、元の日常生活にまだ完全に戻れていないので、家庭を中心とした近隣の交流から生じる受け止めに留まっているが、退院1カ月後に患児や母親の行動範囲が広がり、病気を持つ患児が社会生活に踏み出していく第一歩になることを示している。行動の拡大は、患児と母親の両方にとって必要不可欠であるが、それに伴う新たな不安の出現にも着目する必要性を示している。さらに、退院1カ月後には、〈医療関係者からの言葉で不安になった〉も加わっていた。母親は知り合いの医療関係者と出会う機会が多くなり、そこから得られた情報に対して戸惑いを感じる内容があったと述べていた。桑田らは、在宅の障害児を持つ母親も医療者からの情報に同様の不安を述べていると報告している<sup>7)</sup>。このように医療者からの情報には、

プラスになる情報もあれば、逆に不安に陥る情報もあることが示されている。医療者は専門職であるがゆえに、病気に関する様々な知識や情報を持ち合わせるが、母親に伝える場合は、母親がすでに得ている情報の内容と新たに提供した情報の受け止めを十分に考慮した上で情報提供する事が必要である。

## 2. 看護への示唆

退院1週間後は、日常生活に関する漠然とした不安を表出できるような援助が重要であると思われる。そのためには、外来受診時に母親が話せるような場を意図的に提供するなどの援助が求められている。退院1カ月後では、家庭生活や地域での生活から生じる具体的な不安を軽減できるような情報提供や相談ができるような援助が必要であると考えられる。こうした問題に対処する支援の一つとして、現在、看護師が対応する相談窓口を設置する病院が全国に増えつつある<sup>8)</sup>。慢性疾患患児を持つ母親が家庭で生じた不安について、気楽に話ができる相談窓口の設置や、外来看護師からの意図的な話しかけなど、退院後早期の時点から介入ができる具体的な支援方法の確立が必要である。

また、退院後の時期による母親の不安を明らかにすることは、病棟で退院指導を行う場合に、家庭生活上で生じやすい内容を反映させるために活用できる。

## 結 論

- ①退院1週間後は、漠然とした内容の不安を抱える時期である。
- ②退院1カ月後は、行動範囲が広がった事による不安が生じる時期である。
- ③子どもの将来に関する内容については、両時期に共通した不安になっていた。

以上の事から、退院後の時間的経過によって、慢性疾患の子どもをもつ母親の不安は変化しており、その時期に応じた適切な支援の必要性が

示唆されている。

## 引用文献

- 1) 北林佳美, 櫻井静香. NICU 退院時を持つ母親への育児支援の現状と今後の課題. 日本看護学会論文集小児看護 2005; 35: 62-64.
- 2) 岡崎弘美. 母親からの電話による育児相談を解決するための調査 —退院早期の母親が持つ育児不安を知るために—. 日本新生児看護学会講演集 2000; 10: 66-67.
- 3) 渡辺美英子, 日高知穂, 秋山裕美子他. 小児科病棟における退院指導の有効性に関する研究 —医療福祉支援センターと連携をとったケースを中心に—. Yamanashi Nursing Journal 2005; 3(2): 57-62.
- 4) 米村幸子, 入江亜矢, 谷口さつき. NICUへ入院した児をもつ母親の退院1カ月後の育児支援の検討. 日本看護学会論文集小児看護 2008; 38: 158-160.
- 5) 大藤佳子, 森本武彦. 愛媛県小児在宅支援ネットワーク構築のために —愛媛県とNPOとの協働事業を通して—. 日本小児科医会会報 2008; 3: 124-128.
- 6) 及川郁子. 小児慢性疾患患者の療養環境向上に向けて. 小児保健研究 2006; 65(1): 5-10.
- 7) 桑田弘美. 障害児の在宅ケアにおける家族への支援体制強化に関する調査研究Ⅲ —難病や障害児を持つ子と家族への支援の方向性—. 地域看護 2005; 36: 132-134.
- 8) 田阪祐子. 患者の声に応える専門外来ガイド. —小児専門病院における看護外来—臨床看護 2011; 37(12): 1692-1714.

---

Key words ; anxieties, mothers, chronically ill, discharge

---

## Anxieties of mothers after their chronically ill children are discharged from the hospital

Yuki Maeda, R.N.

Department of Nursing, Japanese Red Cross Society Wakayama Medical Center

### Summary

This study aimed to clarify anxieties that mothers of chronically ill children face after hospital discharge and characteristics of these anxieties. Semi-structured interviews were conducted with 10 mothers of children with a chronic disease at 1 week and 4 weeks after hospital discharge. Data were examined using Krippendorff's (1980) content analysis procedure. The following categories were extracted : "factors related to the disease", "concerns about the future", and "issues in everyday life" at 1-week post-discharge ; and "factors related to the disease" and "concerns about the future" at 4 weeks post-discharge. A comparison of data from both data collections revealed that mothers suffered from much vague anxiety 1 week after discharge. Mothers had more specific anxieties related to their individual life situations up to 4 weeks after discharge. Results clearly show the importance of a place where mothers 1 week after discharge can express their anxiety and nursing staff will listen to the mothers' stories. Acceptance of mothers' individual needs can decrease their anxiety as can suggestions of concrete measures provided for them 1 month after discharge.